

絵画における都市景観の描出にみる人物の視線の布置について
—安藤広重『名所江戸百景』を例に—

The recognition of people as landscape in urban space and the features of the layout.

- As an example of "Meisyo-Edo-Hyakkei" by Hiroshige Ando. -

時空間デザインプログラム
08M43215 田附遼 指導教員 齋藤潮
Environmental Design Program
Ryo TATSUKI, Adviser Ushio SAITO

This research treats the drawings that show space in the city and focuses on the relationship of the eyes between 'other' and 'I'. At first we extract the relationship of the eye between the men inside the drawings, 'other' and the man who watch the drawing, 'I'. By this we aim for interpreting the experiences in the city that we have with others. At first we arranged the knowledge about the relationship of the consciousness between 'other' and 'I' from the philosophy. Then we present the model for analyzing the relationship of the eyes between the men inside the drawings and the man who watch the drawings. By using this model we got the patterns of the relationship of the eyes from 'Meisyo Edo Hyakkei' that is selected as the drawings which treats space in the city. Finally by quoting the knowledge from the philosophy we consider the patterns and classify it.

第1章 序論

1-1. はじめに

都市空間において人々は、他者が繰り出す様々な活動を眺め、その場の賑わいを享受し、都市体験を共有することができる。このように「私」はその都市風景の一部でありながらにしてその都市空間の様々な表情を楽しんでいるだろう。

しかしこれまでの都市・景観分野における議論は、概ね他者を排除した上で「私」は都市空間を孤独に体験する者か、もしくは他者が存在してもそれは「私」によって一方的に眺められる対象として研究が進められてきた。

一方、ここで他分野学問に眼を向けてみると、近代哲学分野において同様の思想的潮流がみられる。それはデカルトが、唯一確実に存在するとした「我」を中心に世界を記述したことに始まるが、哲学はその成熟とともにデカルトの自己完結的な体系を退け、次第に私と他者との関係の中で世界を捉えるような、実存主義的思想がサルトルらによって議論されるようになった。つまり、哲学分野における孤独に世界と対峙する「我」からの脱却は、世界を他者と共に、他者との相互関係の中で経験するという姿勢をもって行われたのである。以上のような背景を踏まえ、本研究は、従来の都市景観論に対してこのような重要な命題を打破し、都市体験を私と他者との相互関係により捉るべきという視座に立つ、試論である。

1-2. 研究の目的と方法

本研究では、他者と共に経験される都市体験の記述を射程に置き、本研究ではその体験の地盤となるであろう「私」と「他者」の視線の関係に着目し、両者における視線の布置と、その意識面に及ぶ意味の把握を目指す。

そのために本研究の目的は、都市空間を描出した絵画を対象とし、画中の人物の視線の布置のパターンを絵画観察者との関連もふくめて抽出するとともに、それらが「私」と「他者」との間のどのような「意識上の関与」を表象しているかについて考察することとする。

研究の方法は、まず哲学分野の他者論にみられる「私」と「他者」との「意識上の関与」に関わる論考を参照し、この研究の関心に対する哲学的意味を整理する（第2章）。画中の人物の視線の布置を絵画観察者との関連も含めて抽出するために、パターンを記述モデルを案出する（第3章）。都市空間を描画した絵画として選定した『名所江戸百景』の各図版を、上記のモデルによって解読し、視線の布置のパターンを導出する（第4章）。哲学的知見を援用しつつ、「私」と「他者」との「意識上の関与」とその分類について考察する（第5章）

1-3. 研究の構成

本研究の構成は、以下の通りである。

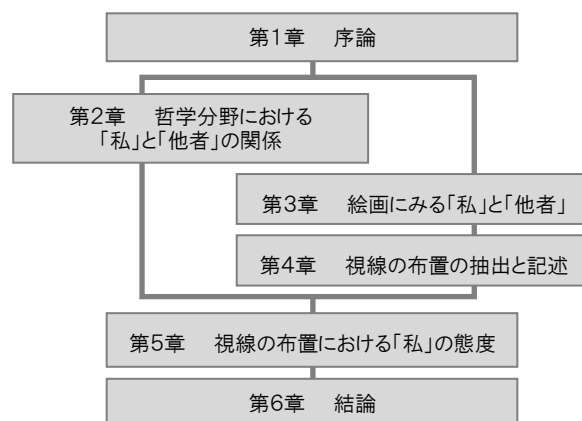


図1 研究の構成

1-4. 研究の位置づけ

“人と人との関係”を論じる研究は以下の二点に集約される。

①都市空間において人を見る行為をする観察者側を扱う研究

- ・西成典久「人の景に着目した都市のオープンスペース評価について」東京工業大学社会工学科卒業論文(1999)
- ・一ノ瀬彩、貝島桃代、鶴沢隆「群衆と周辺環境の構成からみた空間(1)(2)」日本建築学会学術講演梗概集(2004)

②都市空間における人間行動の傾向を探る研究

- ・デズモンド・モリス『マン・ウォッチング』小学館(1980)
- ・W.H.ホワイト『都市という劇場』日本経済新聞社(1994)

これらの研究において、そこに見返される存在としての「私」や見られていることへの意識は問われていない。

また人と人との視線関係には相互関係が存在するという点に触れているものもあるが、この相互関係が両者にもたらす「意識上の関与」のような具体的な考察には踏み込んでいない。従って都市空間における「人の景」は、その重要性が多く指摘されているにも関わらず、用語の定義や計画論・操作論的射程も含め、未だ研究の余地を残す分野であることが分かる。

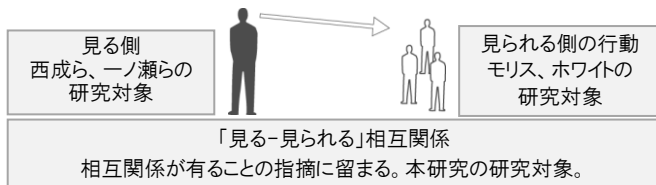


図 2 研究の視点の整理

第2章 哲学分野における「私」と「他者」の関係

哲学分野における「私」と「他者」の「意識上の関与」について扱っている論考を比較検討し、その知見を整理する。

2-1. 人の中に結ばれる視的連関

まず人間どうしが何らかの関係を持つこと、この根本的原理として和辻哲郎は、限定された関係内において自-他の関係が生まれると述べている。この限定された人間どうしの関係に関して和辻は「間柄」と表現しているが、**間柄において「ある者」を見るときには、この見られた者はそれ自身また見るという働きをする者である。…このことは、かかる「見る作用の連関」がすべての見るの地盤となることを示すのである。**としている。つまりこの「見る作用の連関」、言わば人間のあいだで広がる視的連関によって人間関係が限定され、その関係の中で視行為を通じて「自-他」といった関係が描けると主張している。

同様にマルティン・ブーバーは、**人間は汝に接して我となる。向かい合う相手は現れて、消えていく。関係の出来事が集まっては散ってゆく。**として、「見る作用の連関」とその限定は、人間のあいだに漂う流動的な関係として現象することを示している。

2-2. 視的連関における二つの態度

ブーバーは、人間のどうしにおける視的連関にある決定的な態度の違いとして、〈われ-なんじ〉〈われ-それ〉といった二つが存在することを主張している。**関係は相互的である。わたしが(なんじ)に働きかけるように、わたしの(なんじ)はわたしに働きかける。〈われ-それ〉はおそらく自己を〈われ〉と認識して、すなわち、〈われ〉の分離によってはじめて可能となる。**とそれぞれの関係の違いを記している。つまり〈われ-なんじ〉にみられる人間関係は、両者において能動と受動の意識をもつ濃厚な相

互の関係であるが、〈われ-それ〉は、しばしば〈われ〉の分離が可能である非相互的關係として理解される。

2-3. 「私」にまつわる二重の意識

私達はどのようにして自身を知り得るのか。和辻は、**我々は我々自身主体であってその主体を直接に見ることはできない。しかしその主体が外に出ることによって「客観」となり得るがゆえに、我々はまた主観としてこの客観に対立し、そして客観を通じて主体自身を把握し得るのである。**としており、その行動に没入し働きかけている対象の世界に向けられる意識と、行動している私と対象を含めた関係自身に向けられる意識という二重の意識の存在を述べている。ここで重要な点は、私が働きかけている対象への意識においては意識内に私はおらず、一方、私が意識内に登場するためには対象と私の関係を、架空の超越的な立場からの意識をもって捉える必要があるという点である。**〈己れをよく知る〉とは、やむなく自分のうえに他者の観点を、したがって不可避免的に偽りである観点をとることである。**というように、「私」が私と関係する他者との視的連関を把握するためには、これらの二重の意識、特に私と他者の視的連関を俯瞰的・超越的に意識する立場が重要であると考えられる。

2-4. 他者に見られること

議論の地盤としてきた視的連関における両者は、当然〈見る側〉と〈見られる側〉により構成される。**路上は舞台であり、人に見られているとの自覚が役者たちのジェスチャーや動きに出てくる。**として表される〈見られている〉という意識は、どのようなものであろうか。サルトルは、**いかに私の対他存在も私自身であるといっても、対他存在が他者の意識の対象となった私であるかぎり、その対他存在と私=対自存在とは、他者の意識という大きな虚無によって距てられているのだ。…私を見ている他者が私をどう見ているかは、彼自身の自由に属することで、原理的に私の自由を超えている。ここにいつも、他者に見られることの居心地の悪さがる。**という。ここには意識にとって親密であるはずの〈私自身〉が、他者にまなざされることによって近づききれない意識となってしまう事への、根底的な不快感が伴うことが示されている。また、サルトルの指摘には重要な主張が含意されている。それは、人々は他者に対し優位にあること、対自意識を己れの意のままにしておくことを望む、という点である。

2-5. 「われわれ」という共同意識

サルトルは他者論の中で、日常生活における他者と「ともに或ること」、他者との共同存在の経験について触れている。**(服役中に突然女性にまなざされた囚人の例)(私がいま観客に混って映画を見ているという例)**は、サルトルが挙げた「われわれ」の獲得の二つの例であるが、共に人々を統合する存在のもとに、共通の行動や状況を通じて「われわれ」の地盤を築いた点は同様である。しかし前者の例が受動的な体験による共同意識であり、後者の例が共通の能動的な働きかけによる共同意識であることは区別する必要がある。サルトルはこれらの共同意識の表われ方に関して、「われわれ」の意識は、**…人間がはじめから多くの他者のあいだに交わって存在しているかぎり、あらゆる人間的状況が第三者の出現次第いつでも「われわれ」として体験され得ることを、けっして忘れてはならない。**と表現している。

第3章 絵画にみる「私」と「他者」

3-1. 絵画における創作者と画中人物

3-1-1. 画中人物に込められた創作者の意識

J.J.ギブソンは、**すべての画像は、その創作者が注目し、注目するに値するとみなしたものを保存している。**と述べているが、写真や写実的絵画では画中人物の登場はその画像における一側面として記録されているに留まる。しかし画家の非知覚的経験の記録として描かれた非写実的絵画では、画家が絵画中に人物を描きこむ行為が既に画家の恣意性を伴う行為である。



図3 明鐘山観図

画中人物に対する画家の恣意性を垣間見える例として、中国山水画における“臥遊”的画法を挙げる(図2)。詳述は避けるが、この画法では「画中人物の存在を手掛かりに風景を多様な視点から楽しませる」という画家の明白な意図がみられる。この様に、非写実的絵画における画中人物は、画家の意図をもって描きこまれ、その描かれ方には画家が風景をどのように経験したか、その態度が見え隠れする。

3-1-2. 画中人物の視線にみる画家の存在

私達は視覚表象の観賞においてその裏側に創作者の影を覗き見ることができる。画中に人物が配された絵画は、その画中人物がこちら側を向いているもの、向いていないものの二通りとして描かれている。そしてまた画家が絵画を描く際の態度も二通り存在し、画家自身がそこにいるものとして描かれた絵画と、そうでないものである。これらの二分類はそのまま対応はしないものの、確からしくいえることは、画中人物がこちら側を向いて描かれている絵画では、その視線の先にあるのは画家の姿であり、画家の視点に立って画中風景を見ているという点で、観察者にも向けられた視線である。

3-2. 分析対象とその資料性

本研究で扱う人の視行為は、見られることや相互に見合うことを含めたものであった。その為、画家が描画対象である世界にいるものとして描かれ、画中人物に画家がまなざされる側面も含めて画家が描画するような態度こそが、その絵画表象において画中人物との視的連関を分析する本研究の目的に対し重要であることが分かる。本研究では、『名所江戸百景』の以下に示す資料性を考慮し分析対象とした。これは実際の名所空間を地盤としているものの、広重が非写実的性格をもたせた図版構成となっていることは多く指摘されている。

①構図の豊富さとそれが求められた時代背景

『名所江戸百景』が描かれた時代は、江戸後期の名所図会の流行に対し、やや時期を遅くして出版されたと位置付けられる。この源流である『都名所図会(1780)』に関しては、**図会の挿絵の使命は名所景観をリアルに描き出すことにあった。名所図会の挿絵は寺社の境内や園池の全容を俯瞰でとらえ、細緻な筆で克明に描き出すもの**というように、説明的な描画傾向が大

部分であった。様々な名所図会の刊行の中で、実際に眼に映る風景のようにリアリティの高い写生図が散見されるようになった。これらの潮流に対し、『名所江戸百景』が刊行された時代は、人々はその場所をバーチャルに体験できるような描写を求め、説明的な俯瞰的描写では受け入れられなかった。その為『名所江戸百景』は様々な構図や技法を駆使した臨場感豊かな表現によって制作された。これにより、必然的に「画家」と「画中人物」は実に多様な位置関係をもって描写されているという特徴を持っていることが分かった。

②近景型構図にみる広重の意図

『名所江戸百景』の図版の多くでは、部屋や樹木などがごく近景に描きこまれている(図3)。この近像型構図に込められた広重の意図として大久保は、**近像型構図の多用で、名所景観の説明性を犠牲にしてまでも視覚の共有感を重視した「名所江戸百景」の作画姿勢**としている。つまり画家と観察者の視覚を共有し、広重自身の体験を観察者に臨場感として伝える意図が見られた。

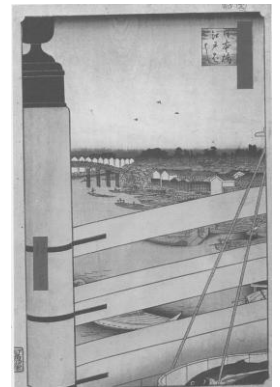


図4 「日本橋江戸橋」の図版

③画中人物の視線の向き

『名所江戸百景』には、画中人物が、画家がいるであろう場所に視線を送るように描かれているものがいくつか存在する。つまり、広重は『名所江戸百景』を描画する際、図版が対象としている場所に画家である自身がいるものとして構想したものであり、それはときに画中人物にまなざされるという形で表現されていると言えるだろう。

3-3. 視線の布置の抽出モデル

前節の資料性を踏まえると、広重が『名所江戸百景』を描画する際には、広重自身が経験した「他者」との視的連関を「画家」と「画中人物」という形で表象していると考えられる。そして、この広重が経験した他者との視的連関を絵画観察者にも共有する意図があったと述べた。この『名所江戸百景』の図版(119枚)を用いて、画家が経験し象徴的に表現した他者との視的連関を、その視線の布置のパターンとして抽出する。その分析方法は、まず各図版の描画内容の解説を参考にしたうえで、①この絵画の観察者である「私」と画中人物である「他者」の視的連関を、まず②「私」の視点から見た「他者」との視線として抽出し、さらにこれを③「私」と「他者」の視線の布置として客観的に記述する。絵画分析の手法を用いる研究は数多く存在するが、このように絵画を鑑賞する人物をも分析モデルに含む方法を採用した研究は見当たらない。

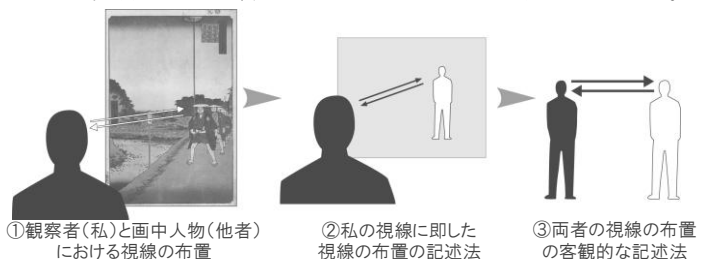


図5 視線の布置の抽出モデル

第4章 視線の布置の抽出と記述

まず4-1では、「私」と「他者」の視線の布置を、4-2では、それらに別の「他者」や視対象としての「風景」が介入する視線の布置を取り上げていく(図6)。

第5章 視線の布置における「意識上の関与」

これらの視線の布置は、画家(広重)が他者との視線のやりとりをもって経験した象徴的な視的連関であるが、各視線の布置パターンにおける「私」の「他者」に対する態度の違いに着目すると、5つに分類することができた。

5-1. 他者と濃厚な相互関係を結ぶ私

「他者」をまなざす「私」が、同様に「他者」からもまなざされ、両者が濃厚な相互関係を結んでいる、または結びうるものである。**見つめ合っていない状態ですが、他者を身体として、またその身体を観察の対象として眺める事ができない。目がかち合うと、…われわれの目は求心的な運動と遠心的な運動とを同時に発生させるような、ある磁場に閉じ込められる。**と表現されるように、眼が合っている事と眼が逸れている事は非常に親密な関係なのだ。これらの両者の視線を揺さぶる相互関係は、〈われ-なんじ〉的な関係として緊張感を帯びた視的連関であろう。

5-2. 他者と共同意識を持つ私

「私」と「他者」が非常に近い場所に位置する図版では、両者は至近にいるが相手をまなざし合わないが、同じ対象を同じように見ることが出来る。一方、「他者」に一同にまなざされている「私」と「他者」は、近い場所に位置する両者がまた別の「他者」によりまなざされ、サルトルの囚人の例と同様、受動的な「われわれ」として近接した両者が結ばれる。つまり「私」と「他者」が近いことは、それだけでは両者の共同意識に及ばないものの、その一つの地盤であり、共に

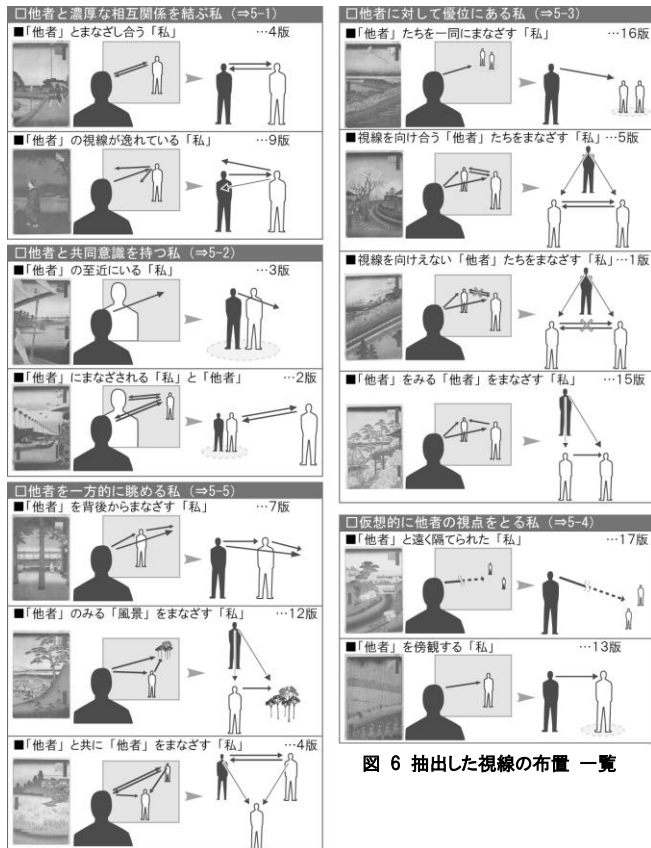


図6 抽出した視線の布置 一覧

まなざすものやまなざされるものが表われ次第、両者はその近接性をもって「われわれ」という共同意識を獲得する。

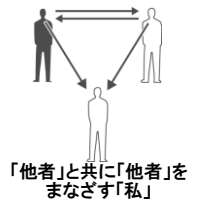
5-3. 他者に対して優位にある私

これらは、「他者」は自身の注意が向けられた方向に視線を送る一方、「私」は彼らの視線やその向けられた対象を捉える事ができる。「他者」に対して優越的立場にある「私」に、意識関係における根底的な心地よさを与えるだろう。

一つは《視線関係を向け合う「他者」たち》をまなざすものとして描かれた。〈われ-なんじ〉的な相互関係を結ぶ他者たちを、私が対象として共にまなざす。またこの対照的なパターンも存在した。さらに《視線関係をもつ「他者」たち》をまなざす視線の布置もみられた。花見を楽しむ人々とその花見に向かう人々など、ときに「他者」たちのやりとりが紡ぐ物語を見るようであり、説話性を帯びている。

5-4. まなざす対象を共有する私

これらの視線の布置で重要なのは、「私」は「他者」と対象を共有している事を知りながら対象を見ている点である。「私」のまなざす先は「他者」のまなざす先ということ踏まえると、「私」は「他者」を、自身が風景に向けた意識の延長上に存在すると捉えているのではないかと。これは「他者」の視点に即した「私」の意識、即他意識とも言える視点である。また《「他者」と共に「他者」をまなざす「私」》という視線の布置が、能動的な「われわれ」を形成することは明白であるが、「われわれ」どうしがその有り様を互いに把握することができる事も指摘できる。超越的意識として捉えようとした「私」と対象(ここでは第三者)の関係は、既に他者の身体と同様の対象との関係によって可視となっている。つまり、この時の両者は〈鏡像的視線関係〉と解釈できる。



5-5. 他者にまなざし返されない私

《「他者」と遠く隔てられた「私」》と《「他者」を傍観する「私」》が、以上の分類と異なる点は、「他者」にまなざし返されるという意識が欠落した態度で「私」が視線を向けていることである。つまり、他者が遠景に位置し、表情や視線の方向は分からず、何か自身にまつわる事物に没頭している。

第6章 結論

6-1. 結論

■ 哲学分野における他者論の知見整理により、両者の視線の布置とその意識上の関与を様々に説明することができた。

■ 広重の名所江戸百景に見られる視線の布置は13通りに抽出され、それらにおける「私」の態度は5つに分類された。

6-2. 今後の課題

■ 本研究の構想に対し、時代・社会背景の考慮なしでは、本研究の考察をそのまま現代都市空間に援用することが難しい。

■ 今後、他の絵画分析をもって分析を補完する必要がある。

参考文献 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波全書/マルティン・ブーバ『我と汝』岩波文庫/西田幾多郎『無の自覚的限定』岩波書店/J.P.サルトル竹内芳郎 訳解説『自我の超越 情動論粗描』人文書院/ミシェル・フーコー 渡部一民・佐々木明訳『言葉と物 -人文科学の考古学-』新潮社/竹内芳郎『サルトル哲学序説』筑摩書房/小川裕充『臥遊 中国山水画 -その世界』中央公論美術出版/J.J.ギボン『生態学的視覚論』サイエンス社/W.H.ホフワ『都市という劇場』日本経済新聞社/浅野秀剛・吉田伸之編『広重』朝日新聞社/久保純一『広重と浮世絵風景画』東京大学出版会/宮尾しげを『名所江戸百景』集英社